

日本で台風の季節といえば8月・（ ）だが、台湾では6月には台風の（ ）なっている。これは台湾で働く（ ）、大きな問題である。運が悪いと、（ ）台風に遭い、夏休みに日本で（ ）台風の被害を受けることになるからである。

（ ）、「台風」は、なぜ台風と呼ばれるのだろうか。（ ）日本では、夏から秋にかけての強い（ ）「野分」と呼んでいた。野分というのは、野原の（ ）搔き分けるように吹く風という意味である。和歌や（ ）使われた優雅な語だが、今では（ ）使われない。「台風」の語源としてよく（ ）するのは、台湾から来る風だから（ ）という話である。しかし、「台風」は、戦後に（ ）使われた表記で、もともとは「颱風」と（ ）という。そうならば、「『台』湾から来る『風』」では（ ）なる。もっとも、台湾の立場からすれば、（ ）台湾にも來るのだから、「台湾から來る風だ」（ ）日本側の言いがかりだといえなくもない。実は、（ ）「颱風」という語は、日本では、1907年に岡田武松博士が論文の（ ）使ったのが初めてだと

いわれている。しかし、正確な（ ）知られておらず、  
中国福建省地方で使われていた「颱」（ ）語（台湾の  
辺りの風という意味）を借りたものだという（ ）あ  
る。それが正しければ、台湾から来る風だから（ ）  
いう話もあながち間違いではないことになる。

（ ）、「颱風」は、英語の「typhoon」に漢字を  
( ）だといわれることもある。さらには、「嵐」を  
( ）アラビア語の「tuffon」やウルドゥー語で「暴風  
雨」を（ ）「tufan」に由来するという説もある。  
ただ、明治時代には「タイフーン」というカタカナ語も使われていたよ  
うであり、（ ）「typhoon」を「颱風」と書いたとす  
る説は少し（ ）あるようにも思われる。

また、「颱風」（ ）語は、中国語（広東語）の  
「大風(tai fung)」をもとにしているという考え方（ ）。  
中国語の「大風」がアラビア語の「tuffon」になり、（ ）  
英語の「typhoon」になって、中国語に逆輸入された（ ）  
「颱風」となったという説である。日本語の（ ）、それ  
をさらに輸入したことになる。

（ ）、「typhoon」の語源は、ギリシャ神話にあらわ

れる（ ） 「typhon（テュフォン）」だという説もある。

テュフォンは、100の蛇の（ ）を持った巨大な龍で、

（ ）からは炎を吐き、口からは溶岩を吐き出し、巨大

な（ ）太陽を覆い隠し、竜巻や嵐を（ ）

いわれている。もともと「typhon」は、疾風という（ ）

ギリシア語で、テュフォンは後には「風の神」と（ ）に

なる。もし「typhon」が「台風」の語源ならば、（ ）

怪物が現代の日本や台湾で暴れ回っている（ ）ことで、

少しおもしろい気もする。